

コザークするウクライナ

原真咲

《要旨》

長年受け継がれた口碑には、ある形象が完成された「究極因」^{エンテレヒー}が現れる。その探究は、口碑の担い手の世界を今日に明かす。本論では17世紀に生まれたコザーク歌謡『嗚呼丘では麦刈り人らの麦を刈る』の分析を通じて、ウクライナ人が双極を成す「究極因」を持つ様を察かにする。

近代の幕開け、ウクライナ人は目まぐるしく発展する《ヨーロッパ》世界の中心と、その周縁たる《野性の野》^{ディーグ・ポーレ}とのあいだを往き来した。二つの行き先を抱えた彼らは、おのずから《秩序》と《渾沌》、両極に心惹かれ挑戦した。総じてそれは、近代の圧力の下、行き止まりの状況に《出口》を見出そうとする葛藤であった。《コザークした》ウクライナ人は新秩序建設に《出口》を求め、ついには国家をも樹立させたのである。

だが、人々が歌い継いだのは祖たちの国家建設の苦勞ではなく、もう一方の性質、すなわち秩序に逆らう逸脱行為であった。『嗚呼丘では……』は、共同体に留まる「麦刈り人々」が、《旅》に出る《放蕩息子》たるコザークを謡う。コザークは近代の新秩序のなかで孤独化する人々の感じる欠損性を引き受けて《旅》に出るのであり、コザークの《英雄》たる所以はここにあるのである。

《キーワード》

ウクライナ民謡、コザーク、サハイダーチュネィイ、ドロシェンコ、近代

1. 《コザークする》エリートたち

16世紀はウクライナにとって《近代》の幕開けであった。人心は新奇なものを求めて已まず、不安と狂騒のなかに人々の生を投げ込んだ。この時代、自由と富と名声とを求め、泰西諸国の民がドン・キホーテもかくや、《コザーク¹する》²ことを求めて《ヨーロッパ - 世界》周縁の地へ押し寄せた。片や古来よりこの地を知らしめずルーシの公達^{きんだち}もコザークし、そのなかでも御殿を及ぼしたが、1582年、1593年、1596年の流血を経て、³

¹ 「コサック」を指す表記は、藤井悦子編訳『シェフチェンコ詩集』岩波文庫、2022年に倣った。

² ウクライナ語に^{コザクワデー}козакувати (コザークする、若者の生活を送る、独身を通す) という動詞がある。

³ 右を見よ。Кулаковський П. До історії стосунків реєстрових козаків і прикордонних старост у 1578-

原真咲：東京外国語大学 TUFS オープンアカデミー



コザーク共同体は彼らの伝統的秩序を拒絶する。「神の恩寵により」負いたる御稜威も、《近代人》にはその神威を失ったのである。その後 100 年間、新しいウクライナのエリートとしてコザーク軍の引き革を引いたのは、いつかは自分の新しい《公国》を建てんと夢見る《コザークする》士族たちであった。

だが、《コザークする》エリートたちは史料が物語るのとは違う仕方で人々に記憶されてきた。口碑が時とともに改作されるものであることを考えると、古い歌は単に成立時代の記憶を留めるだけでなく、爾後数百年間に人々が抱いた時代時代の夢の集積でもある。その不変の人氣は、歌が担い手の人々に普遍的に共感される《物語》を含み得たことの証である。ここでは、最も有名なコザーク歌謡である 17 世紀の民謡『嗚呼丘では麦刈り人らの麦を刈る』（«Ой на горі та й женці жнуть»）にその《物語》を垣間見てみたいと思う。

Ой на горѣ⁴ да женці жнуть,
А по-підъ горою,
По-підъ зеленою
Козаки йдуть.

嗚呼丘では麦刈り人らの麦を刈る、
丘の麓を、
緑の〔麓〕を
コザークらの行く。

А по переду Дорошенко
Веде своє вѳйсько,
Веде Запорѳзьске
Хорошенько.

^{さきがけ}魁するはドロシェーニコ
手勢を率いる、
ザポローッジャ軍を率いる
^げ実に見事。

По серѳдинѣ Пань Хорунжій –
Пѳдъ нимь кониченько
Пѳдъ нимь вороненькій
Сильне дужій.

中堅担うは旗奉行どの――
跨る馬っ子は
跨る青毛は
剽疾軽悍。

А позаду Сагайдачний,
Що промѣнявъ жѳнку
На пютіонъ та люльку,

^{しんがり}殿するはサハイダーチュネイイ、⁵
女房を替えた
煙草と煙管に、

1583 роках // Вісник Львівського університету. Серія історична. Вип. 34. Львів, 1999. С. 410–413;
Леп'явко С. Козацькі війни кінця XVI ст. в Україні. Чернігів: Сіверянська думка, 1996. С. 202–212.

⁴ 「гора^{ポラ}」はよく「山」と訳されるが、実際には丘や高台を含め周囲より高くなった土地を指す。

⁵ ウクライナ語の母音字 и (左の引用では現在は使われない ы の文字で表記されている) は「エとイ」の中間的な母音を表す。本論ではエ段にイを組み合わせた。

Необачный.

粗忽者。

Ой вернися, Сагайдачний!

嗚呼戻れよ、サハイダーチュネイイ!

Возьми свою жонку,

女房を引き取れ、

Одай мою люльку,

我が煙管を返せ、

Необачный!

粗忽者!

»Минѣ зъ жонкою не возиться;

「女房に費やす暇なし、

»А пютюнѣ да люлька

「煙草と煙管は

»Козаку въ дорозѣ

「コザークの道中に

»Знадобится!

「入用じゃ。

»Гей! хто въ лѣсѣ? озовися!

「へい! 森に伏す者は答えよ!

»Да вы́крешемъ огню,

「いざ火を起こさん、

»Да потягнемъ люльку –

「いざ煙管を持たん——

»Не журия!...»⁶

「悲しむな! ……」

日本でなら何かがやって来るのは(水平線の彼方でないとすれば)連なる山の稜線越しであるところ、ウクライナでは山丘に沿った谷影から現れるらしい。当て推量で言えば、段丘を縫って流れる大河がウクライナ人の心象風景にあるのであろう。あるいは谷底平野の窪地パールカを流れる糜川の幻か。連続的で形の摺りぬ川の流れ。これは次の如き中世のトポスのポストルネサンス的再演である。「中世は動物のあとを追って小路をたどったり、あるいは大地が裂けてできた断層にそって進むほうを好むのだ。理性は超越の光のなかで働く。新しい歌は朗吟歌の抑揚を帯びる。人々はあのアジアの連禱の未完成で不動の楽句をふたたびとりあげるのだ。[……。] 夢遊病のヨーロッパが、文明の遺跡の上によるめきながら立っている。」⁷ 泰西の《アジアニズム》が、様々な変則的なもの、不合理なもの、心さざめかせるものを引き連れて御祖たちの地層から蛇のように這い出してくる。「ヨーロッパ全体を浸蝕したのは「神聖なるもの」であった」。我々にはここに、

⁶ Ой на горѣ да женьці жнуть // Малороссійскія пѣсни, изданнныя М. Максимовичемъ. Москва, 1827. С. 18–19. メイハーイロ・マクセイモウヴィチ (Михайло Максимович, 1804–73) が記録し、この本で初めて印刷出版した。正書法が現代のものではない。現在よく語られるものとは歌詞も若干異なるが、内容的に問題となる差異はない。「緑の〔麓〕を」が「窪地の谷間を」(Яром-долиною)になるなど。今日では本文に記した歌名・歌詞 («Ой на горі та й жєнці жнуть») で語られるのが普通。

⁷ ジル・ラプージュ (中村弓子、長谷泰、巖谷國士訳) 『ユートピアと文明』紀伊國屋書店、1988年、63頁。次の引用も同じ。



図 1 《野性の野》に横たわる 1648 年黄水合戦蹟（ジョウトオレクサーンドリウカ、2015 年、本稿写真はすべて筆者撮影）。この丘の麓の広い谷（窪地）は黄水という川の名残で、現在も「公の雨裂窪地」という名の川が流れていることになっているが、水流が見えない

超越者の天啓の後光を戴くバロックの幕開けが透けて見える。

麦刈る人々にとって、コザークは《どこからか流れて来た者たち》である。これもまたコザークの一つの本質を表している。ところで「旅」という字は元来軍隊を意味し、軍隊の移動する性格から転じてこの文字は「たび」に当てられたのだが、コザークとは丁度この二つの意味の「旅」そのものである。歌の演奏時には「へい、谷間を、へい、広い」谷間を進んでいくと繰り返される。この繰り返

返しは各連最終行と組み合わせられて謡われ、冴の返答のような律動を歌に与える。延々続く隊列の様は、次々コザークが現れる繰り返しの性質を帯び、その移動性も繰り返しゆえに円環的な運動性となる。全体に滑らかな上下動を繰り返す旋律も、時空間的の反復性を表現する。コザークたちは無時間の空間を夢遊病のように徘徊する。

「谷」とは「下方」である。⁸ 歌の世界は丘の上と下とで二つに隔絶対比されている、《コザークする - 旅する》者たちを、しない者たちが見下ろす。謡い出しで刈られているのは、17 世紀に一般的であったライ麦であろう。ウクライナ人はライ麦を食用に供し、蒸留して火酒の原料にもした。ライ麦はウクライナ語で「жито」と言い、「人生」や「生活」を意味する「життя」と同根である。天と地の現象が対応しているという、近世流行の占星術的世界観に基づいて考えれば、丘の上の出来事と麓のそれとは照応関係にあると考えるのが自然である。農民たちの一見平和な世界と、一見それとは対極にあるコザークたちの修羅の道ゆきとは、実は一体である。農夫たちは実りの収穫を、コザークたちは血みどろの収穫を、それぞれの流儀で刈り取りに行く。長閑な収穫の風景は一転、生命収奪の場面となる。懸け離れた上下の対立関係は、実は双子的に一体の真理を体現している。

ここには、やがてバロックを隆盛させる 17 世紀ウクライナ人の無常観が現れている。人々が生を営む丘の上の平和には、その麓の谷間を行く死の行進がある。ただし、それ

⁸ долина（谷、低地）、долішній（下部の）、додолу（下へ）、доли（下へ、下で）、долем（下で、低地を）。



図2 『コザーク軍行軍す』（ユゼフ・ブランド画『ステップの歓迎』を元にしたユゼフ・ホレヴィンスキ版画、リヴィーウ歴史博物館蔵、2018年、許可を得て撮影、キャプション題は博物館展示のキャプションに基づく）軍旗を掲げて楽器を奏で歌う一行の先頭に立つのは、ペトロー・コナシェーヴィチ=サハイダーチュネイ将軍だと見られている⁹

は生き生きと輝く行進である。生と死が近接するこの緊張感が、コザーク黄金期、近世ウクライナ人の世界である。

この歌は恐らくは起源の異なるであろう複数のプロットから成っている。コザークが隊列を組んで進む前半だけ共通し、後半はまったく異なる類話もある。¹⁰ だがその類話

⁹ *Olcowska-Schmidt I.* „Powitanie stepu” Józefa Brandta a „Węgierski pochód konny” Johanna Gualberta Raffalta. *Przyczynek do historii plagiatu w malarstwie XIX wieku // Quart. Kwartalnik Instytutu Historii Sztuki Uniwersytetu Wrocławskiego*. Wrocław, 2019. Nr 1(51). S. 10.

¹⁰ ウクライナ民謡収集家のリトアニア人イエズス会士ドメニク・ルドネーツイケイイ（Доменік Рудницький, 1676–1739）が1713年に記録し、友人のラウレンティイ・ヒーントウト（Лаврентій Гінтовт, 生没年不詳）と連署の手稿集（1702–16の成立）に収めた類話を、文献学者ウオロディーマイル・ペーレッツ（Володимир Перетц, 1870–1935）が見つけて1901年に誌上発表した（*Перетц В. К.* *Замітки и матеріали для історії пісні в Росії. I–VIII.* Санктпетербургъ: Типографія Імператорської академії наукъ, 1901. С. 31）。「嗚呼丘では麦刈り人らの麦を刈る、／麓の谷間をコザークらの進みゆく、／彼らのうちに三將軍あり、／ザポロージュヤ軍率いて谷間を進む。／第一の將軍ドロシェンコ、／見事にザポロージュヤ軍率いる。／第二の將軍サハイダーチュニク、（*Drugi Hetman Sachaydacznik,*）／コザーク三百亡ぼしたひどい粗忽者。（*szto zhubiw trzysta kozakow, zły nieobacznik.*）／第三の將軍ドロホズデンコ、／モスクワ軍率いる疾々と（*borozdenko*）。／リャーフ人たちが道をゆく。丘越しに呼びいて其方に曰く「神の助けあれ」と。／コザークらを神が助けんことを、／リャーフ人らに鉄砲で答うるを。」内容は断片化しており、より古い類話の存在を示唆する。

「ドロホズデンコ」なる姓はウクライナ語になく、別の姓の誤りか曲節のための変更であろうとする点では研究者の意見は一致する。ボレイース・フリンチェンコ（*Борис Грінченко, 1863–1910*）は、1665年の反パウロー・テテーリヤ將軍、反ポーランド蜂起の指導者、ブラーツラウ連隊長ワセーリ・ドロズデンコ（*Василь Дрозденко, 1665 没*）に比定する。イワーン・カマーニン（*Іван Каманін, 1850–1921*）はモスクワ人の姓の転訛とする。曰く、これは忘却された「モスク

は比較的早い段階で忘れられ、19世紀まで歌い継がれたのは上掲の内容を持つ類話であった。

「この歌にはザポロージャ衆の女性に関する性分が非常によく表されている」¹¹とはよく言われることであるが、この性分を肯定的モラルに誤解してはならない。「サハイダーチュネイ」の行動は明らかに非常識で反社会的、人を驚かすべきものである。それゆえ、斜に構えぬ聴衆は呆れておもしろがるのであり、歌のなかでも驚いた声の主が「粗忽者！」と言って彼をたしなめ、呼び戻そうと慌てているのである。この声はほとんど聴衆から自然に湧き上がってくる合いの手であり、ツッコミである。社会の常識を表すのは声の主の方である。「サハイダーチュネイ」が英雄然としてくる所以はここにある。歌にとって重要なのはこの点であり、現実のザポロージャ衆の性分の反映を見るよりも、このような歌こそが英雄としての《コザーク》像を完成していった、そのことこそ見るべきである。

この歌の19世紀まで伝わった類話はいずれもこの「女房を煙草に交換する」プロットを持つ。¹² 恐らく、妻女交換のプロットが元来あったのであろう。それは、中世の物語や昔話に見られる、妻とその《双子》関係にあるような姉または妹とを交換するプロットにも共通する。女性の助力者が贈り物を齎す昔話の残滓も見て取れよう。だが、ここでは明らかな不等価交換の宣言によって、価値は転倒、あるべき秩序が乱されるのである。

一部の銜学者を除き、大抵の人はこれは17世紀初頭のコザークの将軍ペトロー・サハイダーチュネイのことであると直感的に信じてきた。というのも、この人物が唯一の著名な英雄的「サハイダーチュネイ」だからである。彼らは、自分たちが「粗忽者」と言いつつ実のところは《英雄》を謡っているのだと知っている。

だが、この歌に関する議論が盛んに行われた19世紀から20世紀初頭には、この「粗忽者」をペトロー・サハイダーチュネイと看做すことに断固反対する歴史家がいた。¹³ 彼

ワの「コザークの部将の姓で「ザポロージャ・コザークには覚えにくいものであった」(Каманін І. Що до пісні про Петра Сагайдачного // Записки Українського Наукового Товариства в Києві. Кн. 2. Київ, 1908. С. 231)。

¹¹ Максимовичъ. Малоросійскія... С. 214.

¹² 例として、パンテレイモン・クリーシュ採集とされる類話を挙げる (Чубинский П. П. Труды этнографическо-статистической экспедиции в Западно-Русский Край. Т. 5. С.-Петербургъ, 1879. С. 958-959)。マクセイモウヴィチと異なるのは主に2箇所。「手勢を率いる、／ザポロージャ軍を」(«Веде своє військо, / Військо запорожське»)。「煙草と煙管を返せ、」(«Одай тютюнь, люльку,»)。

¹³ ドメイトロー・ヤウオルネイツィケイイ (Дмитро Яворницький, 1855-1940) は、人物を巡る議論をペトロー・ドロシェンコ - 非ペトロー・サハイダーチュネイ説とメイハーイロ・ドロシェンコ - 是ペトロー・サハイダーチュネイ説に大別する (Яворницький Д. Гетмань Петръ

らの信じるところでは、ペトロー・サハイダーチュネイイはコザーク水軍を率いて異教徒の支配するヴァルナや《帝の都》やカファ¹⁴ を焼き討ちしたあっぱれ大將軍、ポジャールスキイ公の仕立てたモスクワの人民義勇軍^{オボルチュエニコ}を蹴散らしポーランド王子を御救い参らせた百戦錬磨の戎事の天才、正教会復興に尽力し、キーウ兄弟団のために大聖堂を建て兄弟団学校も設立した敬虔な正教徒、そしてホティーン¹⁵ 戦争で英雄的最期を遂げる（重傷を負って翌年亡くなる）悲劇のヒーローとして民謡に記憶されるべきであり（なぜなら歴史上そういう人物であったから）、隊の後ろから遅れてくっついてきたり、女房を煙草と交換したり、謡い手に注意されたりする滑稽なダメ人間であってよいはずがない。無論、我々にはこのような感情論を受け入れる余地はない。この議論をここで延々することは本論の腰を骨折させるので避けねばならないが、史的ペトロー・サハイダーチュネイイについては少し振り返っておこう。¹⁶

Конашевич Сагайдачний // Летопись Екатеринославской ученой архивной комиссии. Вып. IX. Екатеринослав, 1913. С. 54–56。前者を唱えたマクセイモーヴィチはこう述べる。「サハイダーチュネイイの名の下に見るべきは郷邑の幕僚の誰かであって、進取的なドロシェンコの 60 年前まで生き活動した、今日なお南ロシアにサハイダーチュネイイ道としてその記憶を留めている、かの高名なる恐れ知らずの將軍、コナシェーヴィチ・サハイダーチュネイイではない」（Максимович. Малороссійскія... С. 214）。タデウシュ・コジョン (Tadeusz Korzon, 1839–1918) は、1686 年にザポロージュヤ^{くんのかみ}軍衛長であったフレイホーリイ・サハイダーチュネイイ (Григорій Сагайдачний, 生没年不詳) の存在を指摘した (*Korzon T. Dzieje wojen i wojskowości w Polsce. T. 3 Dokończenie epoki przedrozbiorowej. Epoka porozbiorowa. Lwów, Kraków, Warszawa: Wydawnictwo Zakładu Narodowego im. Ossolińskich, 1923. S. 24*)。フリンチェンコはルドネーツィケイイに「サハイダーチュニク」とあるのを根拠に歌の人物はサハイダーチュネイイでないと断定、ペトロー・ドロシェンコやドロズデーノコの政敵で、反ポーランド、反テテリヤ將軍派の將軍位請求者ステパーン・オパーラ (Степан Опара, 1665 没) かダツコー・デーツィク (Дацко Децик, 1665/70 以降没) の姿を見る (*Гринченко Б. Пісня про Дорошенка й Сагайдачного // Записки Українського Наукового Товариства в Києві. Кн. 1. Київ, 1908. С. 44–71*)。だが、二人と「サハイダーチュニク」を結ぶ史料は示さないし、「ドロズデーノコ」を「ドロズデーノコ」と看做すのはよいと言う。

後者の説はイズマイル・スレズネーフスキイ (Измаил Иванович Срезневский, 1812–80) が唱え (*Срезневский И. Запорожская старина. № MD–MDCXL. Харьков, 1833–1834. С. 105–111*)、その死後、カマーニンが引き継いだ (*Каманін. Що до пісні про Петра Сагайдачного... С. 217–231*)。

¹⁴ Кафа, Cafā. オスマン語とクリミア・タタール語でケフェ (Kefe)。現クリミア自治共和国の地区中心市フェオドーシヤ (Феодосія)。ジェノヴァが支配、のちオスマン帝国、ケフェ州中心市となる。

¹⁵ Хотин。現チェルニウツィー州、ドニステール地区の市共同体中心市。共和国南辺を守る要衝。

¹⁶ 特に右を参照。*Яворницькій. Гетмань Петръ... С. 1–58; Сас П. М. Петро Конашевич-Сагайдачний: молоді роки. Київ: Інститут історії України НАН України, 2006; Сас П. М. Конфесійна політика Петра Сагайдачного початку 20-х рр. XVII ст. в контексті тогочасних суспільно-політичних і державотворчих процесів на Україні // Українська козацька держава: витоки та шляхи історичного розвитку: Матеріали респ. іст. читань. Вип. 1 / АН України. Інститут історії України; Відп. ред. В. А. Смолій. Київ, 1991, С. 36–42; Сас П. Иконографія П. Конашевича-Сагайдачного: джерела та авторські версії // Україна в Центрально-Східній Європі (з найдавніших часів до кінця XVIII ст.).*

2. ペトロー・コナシェーヴィチ、人呼んでサハイダーチュネイ

サハイダーチュネイというのは矢入れ（胡籙）を意味する「サハイダーク」の派生語で、コザークとしての^{あざな}字であり、ペトローの本当の姓はコナシェーヴィチである。これは、同時代の史料にそう書かれている。¹⁷ 研究者はしばしばペトロー・コナシェーヴィチ＝サハイダーチュネイ（Петро Конашевич-Сагайдачний, 1582 頃¹⁸ -1622）と表記する。

ペトロー・コナシェーヴィチは、王冠領のルーシ県、ペレーメシユリ地方のサーンビル市¹⁹ 近く、クーリチツィ村²⁰ に生まれた正教徒士族²¹ であった。したがって、彼もまた流行りのコザークした士族の一員である。クーリチツィは著名なコザークを多く輩出した。

サーンビルで初等教育を受けたのちオストロフ学院に進学し、キリロス・ルカリスの下で学んだと考えられている。正教文化の中心オストロフの環境は、若きペトローの価値観醸成に大きな影響を与えたい。ウクライナの庇護者としてのオストロジケイイ公の姿も間近に見たであろう。その後、リヴィーウやキーウで教師をしたり裁判所に勤務したりしていたとされる。その前半生は16-17世紀の典型的なウクライナ士族の経歴を示しており、コザークに参加したその後半生もまた、そのような恙無い宮仕えの人生に倦んだこの時代の士族が取る選択の典型を表している。

ザポロージュヤ軍に入ったのは1598年と考えられ、「矢入れ持ち」の^{あざな}字を頂戴したとされる。きっとまるで矢が^{やなぐい}胡籙から次々放たれるように射たのであろう。日本であれば

Вип. 6. Київ: Інститут історії України НАН України, 2006. С. 239-280; Сас П. М. Запорозжці у польсько-московській війні наприкінці Смути (1617-1618 рр.). Біла Церква: Видавець Пшонківський О. В., 2010; *Пупіс П.* Петро Конашевич-Сагайдачний: історичні нариси життя та діяльності // Сіверянський літопис. 2012. № 1-2. С. 18-34.

¹⁷ ラテン語で書いたヤクブ・ソビェスキによれば、「ペトルス・コナシェヴィツィウス」(Petrus Konafzevicius) は「軍事的な^{あざな}字」として「サハイダチュヌイ」(Sahaydaczny) と呼ばれていた (*Sobieski I. Commentariorum Chotinenfis belli libri tres. Dantiscum, 1646. P. 35*)。ただし、本当の姓を含め、家系は従来の研究では厳密には断定できていない。右を見よ。Смток І. До питання про походження Петра Конашевича Сагайдачного // Генеалогічні записки. Львів, 2014. Вип. XII (нової серії VI). С. 11-16.

¹⁸ 生年の記録はないが、ペトロー・サースは学歴、1616年の將軍初選出までにコザーク軍で積んだはずの経歴、ソビェスキとの年齢差などを勘案して、1582年頃の生誕と推定する (Сас П. М. Коли народився Петро Конашевич-Сагайдачний? // Український історичний журнал. 2011. № 3. С. 36-49)。

¹⁹ Самбір. 現リヴィーウ州地区中心市。

²⁰ Кульчиці. 現リヴィーウ州、サーンビル地区の村。

²¹ ウクライナ士族ヤケイム・イエールレイチ (Яким [Ян, Йоаким] Єрлич, 1598-1674) は、1620年10月12日付の日記に書いたサハイダーチュネイへの称賛に「サーンビルの士族」と記す (*Jerlicz J. Latopisiec albo Kroniczka Joachima Jerlicza, z rękopismu wydał K. Wł. Wójcicki. T. 1. Warszawa, 1853. S. 5*)。



図 3 「ペトロー・コナシェーヴィチ=サハイダーチュネイは、我らが郷党、登録コザーク軍将軍、ザポロージュヤ城柵軍衛長、ウクライナの将にして政治家、比類なき外交家、絶対の軍略家たり。ホティーン合戦の勝利により彼は総大将として共和国国王より剣を授かり、コザーク軍は騎士団の称号を賜れり」（サンズル、2019年）。絵はサコーヴィチの^{くんのかみ}誄から。「ペートル・コナシェーヴィチ・サハイダーチュネイ、彼が国王の恩愛のザポロージュヤ軍将軍」とある。矢を背負い、弓を携えている。左上にあるのは士族のみが持つことのできる家紋で、彼の士族身分を誇示している

「能射人^{よくいるひと} 22 ペトロー」というところであり、弓箭^{せん}の腕前が人物評を左右したのはいずれの国も同じである。その強弓ぶりは今日、民謡の英雄バーイダことドメイトロー・ヴィシュネヴェーツィケイ公（Дмитро Іванович Вишневецький, 1517頃–1563/64）と並び称される。

伝記的叙述は避けるが、コザークの武力を共和国のために役立てながら、奉公と引き換えに登録衆（士族並みに土地所有の権利を有し、国庫から俸給を戴く国家公認のコザーク）増員などコザークの権益拡大、正教信仰の権利、司法行政における自治権を国から引き出した。王に従う登録衆別当^{スタルシイ}（старший）を務めるばかりか、より政府に反抗的な非登録衆も束ね、命を救われたヴワディスワフ王子は感状に将軍^{ヘーチマン}（гетьман）と記して

22 古くは「能射人筑紫國造」への称賛（『國史大系 第壹卷 日本書紀』經濟雜誌社、1897年、338頁）。



図 4 ホティーン要塞南側中央稜堡とペトロー・サハイダーチュネイ將軍記念碑（2013年、記念碑は合戦370周年の1991年に設置）



図 5 ホティーン要塞内郭（同上）
背後はドニステール川で、対岸はポデー
ーリャになる

称した。²³

1621年のホティーン戦争で共和国は前年のツツォラ合戦の雪辱を果たしたが、サハイダーチュネイ麾下のコザークはこの勝軍に貢献した。だが、將軍は負傷し、それが元で翌1622年に没した。遺産の多くはリヴィウとキーウの正教徒兄弟団へ寄付された。士族出の妻とのあいだにルーカシュという息子がいたが、子孫については詳らかでない。²⁴

自らも従軍したヤクブ・ソビェスキ (Jakub Sobieski, 1591–1646) は「コナシェヴィツィウス」の功績を『三卷本ホティヌム戦争回顧録』(“Commentariorvm Chotinenfis belli libri tres”, 1646)に記した。ソツィーニ派の高名な詩人ヴァツワフ・ポトツキ (Wacław Potocki, 1622–96) がこれを元にした詩『ホチム戦争の協定』(„Transakcja wojny chocimskiej”, 1670)にも登場する。²⁵ ウクライナ語ではキーウ兄弟団学校で詠まれた詩などがあるが、第一は同校校長カシヤーン・サコーヴィチ (Касіян Сакович, 1578–1647) の手になる古ウクライナ語の弔詩『高潔なる騎士ペートル・コナシェーヴィチ・サハイダーチュネイ

²³ 1648年までは「將軍」号に明確な規程がなく、ペトローも「別当」と併用した。右を見よ。
Брехуненко В. Гетьман чи старший? За лаштунками номенклатури козацьких провідників (XVI–перша половина XVII ст.) // Наукові записки НаУКМА. 130: Історичні науки. Київ: ВПЦ НаУКМА, 2012. С. 119–129.

²⁴ 例えば、ウクライナ人ロシア語作家コンスタンチーン・バウストーフスキイ (Константин Георгиевич Паустовский, 1892–1968) は、実家には「我が御祖の」サハイダーチュネイ將軍のラテン語文の將軍下知状とメダルがあったと著作『遠き歲月』(«Далёкие годы», 1946)に記す。

²⁵ *Potocki W. Wojna chocimska, poemat w 10 częściach. Warszawa, 1880.*

イ、彼が国王の恩愛のザポロージャ軍将軍を悼む葬送の詩』（«Вършѣ на жалосный погреб зацного рыцера Петра Конашевича Сагайдачного, гетмана войска его к. милости Запорозкого»,²⁶ 1622）である。ここには、弔詩の通例にしたがって故人の生涯と業績が細かく謳い上げられている。誄詩の性質上、美化されている点はあるが、事実無根なことも書かれないので、往時を知る重要な史料となっている。さらに、文学的側面から見れば、問題の民謡はこの詩のパロディーであるとさえ言えるかもしれない。この詩が当時称揚されていた《アレクサンドロス大王》型の愛国的英雄を描いた讚²⁷の類型で故人を描いているのに対し、民謡の方はその類型から愛国的英雄性を取り去った修辭的パラドックスとなっているのである。

教養人であったコナシェーヴィチ本人も文人としての活動が知られる。オストロフで著した問答文学の作品『教会合同解題』を、リトアニア大法官「レーウ・サピェーハはポーラツク合一教会大司教ヨサファート・クンツェーヴィチ宛ての書簡で〈値万金〉と称した。」²⁸ 1651年、ボフダーン・フメリネーツィケイイ将軍麾下のコザーク軍は、ペトロー・サハイダーチュネイの詠んだ歌を謡ってベレステーチュコの戦場へ向かったという。²⁹

後世は強大なオスマン艦隊を撃破した水軍の将として記憶し、³⁰ その名を艦船に冠した。モスクワ遠征の記憶は、その経路と伝承された「サハイダーチュネイ道」なる街道をモスクワ国との国境、ウクライナ北部のシーヴェル地方に近代まで残した。³¹ リヴィーウの国立陸軍大学校もその名を冠する。件の民謡はイエウヘーン・アダムツェーヴィチ作曲『ザポロージャ行進曲』（«Запорозький марш», 1969 初演）に組み込まれ、イワーン・メイコライチュク主演映画『なくした手紙』（«Пропала грамота», 1972 製作）

²⁶ Сакович К. Вірші на жалосний погреб зацного рицера Петра Конашевича Сагайдачного // Українська література XVII ст.: Синкретична писемність. Поезія. Драматургія. Белетристика / Упоряд. приміт. і вступ. стаття В. І. Кречотня; Ред. тому О. В. Мишанич. Київ: Наукова думка, 1987. С. 220–238.

²⁷ Макаров А. Світло українського бароко. Київ: Мистецтво, 2018 (текст – 1994). С. 97–108 を見よ。

²⁸ Яворницькій. Гетмань Петръ... С. 16.

²⁹ Таїрова-Яковлева Т. Повсякдення, дозвілля і традиції козацької еліти Гетьманщини / пер. з рос. Т. Кришталовської. Київ: ТОВ «Видавництво “Кліо”», 2018. С. 133.

³⁰ コザーク水軍の活躍はウクライナ人の民族意識に特別な意味がある。サコーヴィチもザポロージャの「騎士たち」が古代の公「オレーフを追いて走舩そうふねに乗りて帝の都を襲えり」という節を、キウ大公ウオロディーメイルのキリスト教受容の伝統を守る大事に並べる（Сакович. Вірші... С. 221）。

³¹ Осадчий Є. М., Дегтярьов С. І. Сагайдачний шлях: від верхов'я Псла до кордону Речі Посполитої // Сумська старовина. Суми: Сумський державний університет, 2021. № LIX. С. 5–20 は実際にこの道を通った可能性を指摘し、19世紀半ばのサハイダーチュネイの民謡に関する先行研究を紹介する。

で人気を博した。同曲は軍に採用され、鉄道駅の発車ベルやキーウの時報になった。ホティーン戦争の恩賜の刀はヴァヴェル城に現存する。ソ連が破壊したキーウの墓所は、発掘調査が予定されている。³²

3. 渾沌を糺す者から秩序を覆す者へ

歴史学上は、ペトロー・コナシェーヴィチは戦場での活躍だけでなく、コザーク軍制の改革者として評価されている。彼は、陣中での飲酒や女色に耽ること、また博打を固く禁じ、軍規違反に対しては死刑を含む厳格な法度で臨んだ。連隊制度を改組し、コザーク軍をより統制の取れた組織に整備したが、彼の改革は 30 年後に独自の国家を成立させる統治組織としてのコザーク軍の質を高めた。彼の死後、その事業を継いだのが同志であったメイハーイロ・ドロシェンコ (Михайло Дорошенко, 1628 没) である。歴史主義者や歴史通は、民謡で前軍を率いている「ドロシェンコ」とはこの人物のことであると考えている。時代のずれを気にしない歴史の半可通は、17 世紀後半に活躍したより有名な将軍、ペトロー・ドロシェンコ (Петро Дорошенко, 1627–98)³³ のことだと思っている。

メイハーイロ・ドロシェンコは「疑いなく才気に溢れ、軍事指導者にして政治家、身内に一目置かれ、ポーランド人にも敬意を持たれた」人物であったとフルシェーウシケイイは書く。³⁴ 1618 年にはペトロー・サハイダーチュネイイ将軍に従いモスクワを攻め、ホティーン戦争でもコザーク軍を率いた。クリミア汗国とオスマン帝国の対立を背景に、1624 年には船軍でコンスタンティノポリスへ攻め入る。1625 年には蜂起を率いた登録衆別当マルコー・ジュマイロ (Марко Жмайло [Жмайло-Кульчицький], 生没年不詳) に代わって将軍に選出され、共和国政府とのあいだにクルーキウ合意を結ぶ。³⁵ このとき倍加された登録衆をキーウ、ペレヤースラウ、ビーラ・ツェールクワ、コール

³² М. Соловйова: На території Києво-Могилянської академії ініційовано проведення археологічних досліджень. 01. 11. 2023 [https://kyivcity.gov.ua/news/marina_solovyova_na_teritori_kyivevo-mogilyansko_akademi_initsiyovano_provedennya_arkheologichnikh_doslidzhen/] (2023 年 11 月 15 日閲覧).

³³ *Дорошенко Д.* Гетьман Петро Дорошенко. Огляд його життя і політичної діяльності. Нью-Йорк, 1985.

³⁴ *Грушевський М. С.* Історія України-Руси: в 11 т., 12 кн. / редкол.: П. С. Сохань (голова) та ін. Київ: Наукова думка, 1995. Т. 7: Козацькі часи – до року 1625. Репр. відтворення вид. 1909 р. С. 509.

³⁵ 講和は右の条項を認めた。コザークの登録数を 3 千から 6 千に倍加、登録衆は政府の四半軍の寄騎となるべし。年俸を 6 万ズウォティに加増。蜂起参加者への恩赦。登録衆は別当選出の権利を保持するが、王または王冠領将軍の認可を得べし。右を見よ。Там само, с. 481–561; *Ковалець Т.* Козацькі повстання 1625 та 1630 рр. в Україні за матеріалами діаріуша Анджея Кості-Збіроховського // Україна в Центрально-Східній Європі. Вип. 15. Київ: Інститут історії України НАНУ, 2015. С. 363–399.



図 6 『ザポローツジャ・コザーク
将軍ピエトロ・ドロツェンコ』(ヨー
ハン・マルティン・レルヒ版画、リ
ヴィーウ歴史博物館蔵、2018年、許
可を得て撮影)

スニ、カーニウ、チェルカーセイ 6 連隊に分けたが、これはのちのコザーク国家の行政単位の基礎となった。1626 年には登録衆を率い、士族のウクライナ軍陣代ステーフアン・フメレーツィケイイ (Стефан Хмелецький, 1590 頃–1630) とともにクリミア汗国の大軍をビーラ・ツェールクワ下に破る。彼らはオスマン帝国とも戦う。かつてドメイトロー・ヴィシユネヴェーツィケイイ公やボフダーン・ルジーンシケイイ公 (Богдан Остафійович Ружинський, 1576 没) のコザーク軍が破壊したイスリヤム要塞³⁶ をオスマン人が 1627 年に再建すると、翌年春、ドロシェーンコ率いる登録衆および非登録衆から成るコザーク軍はこれを破壊する。³⁷ ドロシェーンコはオスマン軍に包囲されたクリミア汗救援のためにコザーク軍を率いてクリミアへ向かい、汗を救出するも、自らはバフチサライ下でイエニチェリの銃弾に斃

れる。墓所は知られていない。彼の生前の功績により、その子ドロフィーイ (Дорофій Дорошенко, 生没年不詳) はヤン 2 世カジミェシュ王により士族に叙せられる。1633 年にはコザークの権将軍³⁸ を務める。ペトロー・ドロシェーンコはその子の一人であり、隣国に分割されたウクライナを戦い取りオスマン帝国の宗主権下に統一した両岸将軍、コザーク国家中興の祖である。イワーン・マゼーパも彼に仕えた。やがてオスマン帝国に失望したペトローは将軍の座を降りるが、モスクワ国への臣従を拒み、1676 年のチヘイレイン合戦に敗れて彼の国へ拉致される。ヴァートカ知事を務めるなどしたが帰郷は許されず、宛行われた領地ヤロポールチュ³⁹ に没す。モスクワに囚われ「翼と自由をもがれた鷲」を歌ったタラス・シェウチェーンコは、ウクライナ人のロストーフ府主教ディメイトリイ (Димитрій [Дмитро Тупгало], 1651–1709) が同郷の「友」を思って礼拝堂を建てたと詠む。⁴⁰ 5 代の孫ナターリヤ・ゴンチャローヴァ (Наталья Николаевна Гончарова, 1812–63) はロシアの詩人アレクサンドル・プーシキンに嫁いだが、1833 年

³⁶ İslâm Kermen. 現ヘルソン州の地区中心市、カホーウカ (Каховка)。

³⁷ Грушевський М. Історія України-Руси. Т. 8, ч. 1. Нью-Йорк: Видавниче товариство „Книгоспілка”, 1956 [Фотопередрук з другого видання, що вийшло у Києві в 1922 році]. С. 38, 41.

³⁸ Наказний гетьман. 将軍不在の現場でその代理を務める者。陣代。

³⁹ Ярополч. 現ロシア連邦、モスクワ州、ヴォロコラームスク地区のヤロポレーツ村 (Ярополец)。

⁴⁰ «Заступила чорна хмара…» // Шевченко Т. Зібрання творів: у 6 т. / редкол. М. Г. Жулинський та ін. Київ: Наукова думка, 2003. Т. 2: Поезія 1847–1861. С. 165–167.

にこの地を訪れた彼は妻の祖先の墓の荒廃を惜しむ。⁴¹ 翌年、礼拝堂は再建。⁴² ソ連時代に破壊されたが、その後、ロシアの財団とウクライナ系住民により再建されている。

歴史主義者は二人のペトローは時代が違うと言って一つの歌に謡われることを認めようとしなない。だが、口碑にはアナクロニズムが付き物ではないか。民謡は歴史をよいと取りし、オールスターの面々で謡っても別に不思議はないのであるから、二人のペトローが隊列を組んでいても一向構わないのである。歌の成立時点ではメイハーイロのことだったとしても、歴史上のドロシェンコとサハイダーチュネイイの関係は歌の継承者の重大な関心事ではなかった。歌はドロシェンコ家がコザーク社会において権威であった時代に成立したらしいが、それならば「ドロシェンコ」某に関する内容は具体性を欠いたごく当たり障りのないものにしておこうとする心理が働いたはずである。だから、畢竟これほどのドロシェンコでもよいのであって、重要なことはドロシェンコというコザークの名門の立派な武将がコザーク軍を従えている華々しい情景を目に浮かべることである。

さて、こうして見ると、サハイダーチュネイイにせよ、ドロシェンコにせよ、歌の登場人物は歴史上はコザークのウクライナの渾沌^{カオス}を克服し、秩序^{コスモス}を齎した者だったことがわかる。姓名不詳の「旗奉行どの」も軍旗を預かる要職であるから、同じ側にいる。ところが歌ではどうであろうか。「ドロシェンコ」や「旗奉行どの」はともかく、「サハイダーチュネイイ」は非常識な挙に出て「粗忽者」と呼ばれている。女性を遠征に同伴することを禁じた史的サハイダーチュネイイの法度を誇張して（あるいは皮肉に）反映しているのかもしれないが、問題は、「サハイダーチュネイイ」はここで飽くまで道理に外れた振る舞いを余人に咎められていることである。彼は秩序の建設者から秩序の転覆者、渾沌の媒介者に転じている。この変身にこそウクライナ人の心性を知るうえで重要な動きが反映されている。彼らにとっての真の英雄とは、「実に見事」な「ドロシェンコ」ではなく「粗忽者」の「サハイダーチュネイイ」だったということである。一般化して言えばこれはハタモノということであるが、ここではどんな標識^{しるし}が立っているかを見なければならぬ。

4. 欠けている英雄

長年歌い継がれてきた民謡の意義を見るとき、重要なのはその変化の過程の歴史的成り立ちよりも、変化を経た完成状態である。つまり、「総て「神話的人間」である」我々

⁴¹ Н. Н. Пушкиной. 26 августа 1833 г. Из Москвы в Петербург // А. С. Пушкин. Собрание сочинений. Т. 10. Москва: Государственное издательство художественной литературы, 1962. С. 132–134.

⁴² Батюк А. О. Два життя – одна доля // Роль інновацій в трансформації образу сучасної науки. Київ: Інститут інноваційної освіти, 2018. С. 103.

人間が受け継いできた「完全な（究極因的に完成した）もの」であるところの「神話的完成物が、地理上のどの地点に発生して、伝播して来たかというのが問題なのではなく、問題になるのは結局それらが象徴論的にどのように累積して完成されていくかという点なのである」。⁴³ あるいはこうとも言える。「語られた話」の事実性は、あるいは精密な意味での事実性とは異なっているかもしれない。しかしそれは「嘘である」ということと同義ではない。それは「別のかたち」をとった、ひとつの紛れもない真実なのだ⁴⁴ と。そこにこそ、その《物語》を語り継いだ人々の心性が現れるのである。所謂“客観的史実”によりも。

ウクライナ文化史を研究した哲学者メィロスラーウ・ポポーヴィチ（Мирослав Попович, 1930–2018）はこの歌に多重的な《分身》構造が含まれることを指摘し、こう述べる。先を行く立派な「ドロシェンコと、笑われる〈粗忽者〉サハイダーチュネイ、〔サコーヴィチの言う〕〈高潔なる騎士〉の対比は一寸見には不可解である。ウクライナの昔日の人気者サハイダーチュネイは笑いの評には相応しくない。訳は単純、つまり、2人の（3人いさえしそだが）ドロシェンコのいずれが念頭にあるにせよ、〈まともな〉コザークたちに対比されるのは笑いを呼ぶのにお誂え向きな〈護符呪術師〉にして〈煙草嗅ぎ〉、そして非婚主義者だということである。」⁴⁵

護符呪術師というのは戦さに臨んで護符を身に着けた者⁴⁶ が由来だとする説が有力であるが、神通力のある護符という標識^{しるし}をつけた者という理解はコザークの不死身の呪術師に対する名付けとして尤もらしく思われる。彼は魔術師であり、変^{ベレーヴェルテニ}怪である。「彼はホルト犬に変身し、そうして敵の秘密を嗅ぎつけることができたという。銃弾も刀も死も受けつけなかった。三度死に、二度蘇ることができた。三度目の死に臨んでは、己が右腕を切り落として7年間それを苦戦の折には軍の先に掲げ、その後墓中の彼へ返すべし、と命じた。1年間彼の墳丘墓にドニプロー川から汲んだ水をやり続けた者は、かかる勇敢なる者の前に墓から出てくる護符呪術師たる長自身^{かみ}の知っていたことを知ることになる。」⁴⁷ ホールトは細身の視覚ハウンドのことで、グレイハウンドやポーランドのハルト、ロシアのボルゾイなどの総称であり具体的な犬種はわからないが、いずれもアジア原産とされる。このような細部にも、この護符呪術師の怪しい東方性、異教性、異界性が現れている。

⁴³ 以上、山口昌男『文化と両義性』岩波書店、2000年（初版1975年）、43頁。

⁴⁴ 『村上春樹全作品1990～2000⑥アンダーグラウンド』講談社、2003年（1997年）、655頁。

⁴⁵ Попович М. В. Нарис історії культури України. Київ: АртЕк, 1998. С. 206.

⁴⁶ Sprenger I., Infytor H. Młot Na Czarownice. Przez Stanisława Ząmbkowica, sekretarzą Xcía le^o Mci Oftroskie^o, Kábstellana Krákowskiego. Kraków: Drukárnia Symoná Kempiniego, 1614. S. 171.

⁴⁷ характерник // Жайворонок В. В. Знаки української етнокультури: Словник-довідник. Київ: Довіра, 2006. С. 615–616.



図 7 各地でコザークの煙管（焼き物）が多数出土している（ザポリーヅジャ市内、ホールティツヤ島、ザポローヅジャ・コザーク歴史博物館「コザークのママイと煙管」展、2013年）

煙管（図 7）もまた東方起源であり、17 世紀初頭にオスマン帝国から伝来したとされる（ウクライナ語の「煙管」と「たばこ」はともにトルコ語由来）。⁴⁸ 喫煙は、異教的東方世界から来た非伝統的且つ変則的で怪しい（ときに悪魔と結びつけられる）行為であった。

いかがわしい「サハイダーチュネイ」に英雄性を与え、人々の喝采を浴びせるのは、その逸脱行為である。17-19 世紀⁴⁹ ウクライナの各家庭に掲げられていた《コザークのママイ》の虚ろ画⁵⁰のアレゴリーにあるように、煙草や煙管は吹けば消える煙のような儚さの象徴であるわけだが、このような虚妄の物品に自分の生涯の伴侶を交換してしまうなどというのは、常人には甚だ不可能なことである。そもそも女性から手を引くことは難しい（本論では「女房」と訳したが、「*жінка*」は「女性」も意味する）。非婚もまた共同体においては極めて反抗的な兆候であり、もしそれを主義として通せば、最終的には共同体からの疎外をも招いたであろう。したがって、隠遁にも通じて

いる。こうした不可能事をいとも容易く実行する「サハイダーチュネイ」とは、まさしくかのコザークの英雄、ペトロー・サハイダーチュネイにほかならない。そう人々は合点したのである。

彼の持つ標識^{しるし}は、謂うところの良識なるものの欠如である。良識は人間の住む世界の尺度を表しており、それによって彼、彼女の世界は測られ、規定され、線引きされる。実はそれこそが歴史上のサハイダーチュネイが構築したはずのシステムである。その秩序の支配に人々は自らを規定され、そこからのみ出しは人間性からのみ出しと解

⁴⁸ люлька // Етимологічний словник української мови: в 7 т. / редкол.: О. С. Мельничук (гол. ред.) та ін. Київ: Наукова думка, 1989. Т. 3: Кора–М. С. 326; пютион // Етимологічний... 2006. Т. 5: Р–Т. С. 696.

⁴⁹ Ласка І. М. «КОЗАК МАМАЙ», «козак-бандурист» // Енциклопедія історії України: Т. 4: Ка–Ком / Редкол.: В. А. Смолій (голова) та ін. Київ: Наукова думка, 2007. С. 405.

⁵⁰ 「コザークのママイとは、[...] 人生の刹那に過ぎゆくことの象徴」（*Потапенко О.* Мамай-козак // Енциклопедичний словник символів культури України / за заг. ред. В. П. Коцура та ін. Корсунь-Шевченківський: Видавництво В. М. Гаврищенко, 2015. С. 476）。生と死を表す諸アレゴリーが雑然と並べられたこの絵の主題は、《死ヲ忘ル勿レ》をおいてほかにない。

積される。良識とはそのようなものである。だから、人並み外れた「サハイダーチュネイ」の過剰性は翻って人間性の欠損の型となるのであるが、この類型化されることで純化された《聖なる欠損性》は、人々が各々持つ欠損性の原型、その一つの「究極因」として機能するのである。つまり、人々は彼の物語を、自ら心中密かに抱える疎外感の延長線上にあるものとして受け入れ、彼の物語を自らの物語に一時的にせよ同化させる。この時代のウクライナ民謡に欠損性を翳した型の主人公が多いのは、この時代のウクライナ人が激しい近代化という奪・脱 - 伝統化のなかで世界から疎外されていく自分をひしひしと感じ、行き場のない夢遊感と、自らの裡に隠した欠損性を抱いていたことの反映であろう。そして、この感覚がコザーク全盛期に進展した文化のバロック化と結びつく。その中核にあるのもやはり、大いなる疎外と自らの不完全たること、つまり自らの欠損性の痛感なのである。

人々が「サハイダーチュネイ」に「粗忽者！」と呼びかけるとき、誰もが自らのうちに小さな「サハイダーチュネイ」を抱えている。この《英雄》は、人々のそれぞれの疎外された部分を自らに引き受けて、そのままどこか遠くへ持って行ってくれる《英雄》である。だが、それと同時に人々は自分自身をもこの「サハイダーチュネイ」がどこか遠くへ運んで行ってくれることを夢見るのだ。決して良識からはみ出しはせず、どこへも《旅》することなく、秩序のなかで麦刈りに追われて生涯を送る多くの聴衆にとってこそ、「サハイダーチュネイ」は《英雄》である。彼は、その欠損性を決して否定せず、恥じもしない。煙草を吹かしてこう呼びかけるのである。「悲しむな！」と。

5. 旅するウクライナと《旅》の行方

『嗚呼丘では……』は、旅しない麦刈り人から見た旅するコザークたちの隊列を描いている。彼らが向かう先は明示されない。そこには《旅》の二つの側面が現れている。

先述のポポーヴィチはその二つについて書く。話は、聖書で放蕩息子の帰還を語る福音経の寓話から始まる。「父」の末の息子の行う《旅》の評価は否定的であり、ウクライナ語で放蕩息子を指す「さ迷える息子」という表現もそこから来る。この寓意の意味は、日本で理解されている通りである。だが、これに対して「放蕩息子のウクライナ文学的バリエーションでは、罪に身を委ねそこからの出口を探そうとしない人間として、兄が真っ直ぐ否定的に評価される」⁵¹のである。そして、「同職ギルドの職人たち、誦経奉仕者たち、ヨーロッパの大学を経巡る学生たち、そして逃亡農民たち、〈移動の権ある農民〉も〈移動の権なき農民〉も、コザークたちも、その運動性について述べられたことに照らせば、すべてこのウクライナ人の世界は常に自由と運命の探求の運動のうちに存した

⁵¹ Попович. Нарис... С. 206. 次の引用も同じ。

のである。」

近代の始まり、全ウクライナが《出口》を探して世界を放浪した。《旅》は、まだ見ぬ自由な明日への脱出を意味していた。その意味で、ウクライナ人の主たる二つの旅先であった泰西諸国と東方の《野性の野》^{ディーケ・ボーレ}とが、絶え間ない「探求の運動」のなかに存するウクライナ人の世界の「究極因」^{エンテレヒー}の双極だったのである。ウクライナ人はその両極を自らの裡に抱えていたがために、自らの真実を求めてそのあいだを行き来した。リトアニア法典に明記されさせたウクライナ人の「幸福追求のため」の移動の権利とは、⁵² このようなものであった。そして、恐らくは、その運動の主たる動機の一つは、留まることの閉塞と不幸感、自己啓発の強迫、社会のシステムへの順応によって深まる裡なる疎外であったろう。

太陽が昇り、日々の暮らしが続いていく。実は無時間的に生が続くかのように生きているのは、麦刈る人々である。彼らは麦刈りに精を出して生の破局点^{カタストロフ}を思わぬよう生活する。意気揚々と永の《旅》に出るコザークたちには、去り行く者の哀愁がある。去り行く者は、世は河水の如く絶えず変転し、終わりがあり、二度と戻らぬことを示す。だが、彼らは、我々は、行かねばならぬのである。明日は今日までのようではない。太陽がいつも昇るようには日々は続かない。近代とは、失われていくものの世紀、郷愁の世紀である。

寓話では、放蕩息子は《真実》を見つけて帰ってくる。だが、旅の終わりがいつも幸福であるとは限らない。なぜなら、《世界の真実》など滅多に見つかることはないのだから。その行く末が曠野の野晒しである。「呪われたマルコー」、あるいは「地獄のマルコー」と呼ばれる永遠の放浪者の伝説が生まれ、《旅》の不幸な結末の物語もおのずから生まれた。

16-17 世紀のドゥーマ(抒情詩的叙事詩)『三兄弟のアゾウ脱出』(«Утеча трьох братів з Азова») ⁵³ が描くのも《旅》の悲惨な結末である。二人の兄に見捨てられた弟は《野性

⁵² 「[リトアニア大公国第二法典 (1566)] 第 13 項 / 我が国より敵国以外への出国に就いて

並びに永劫に継承し決議せん、即ち公達と旗本土族の皆々、及び我らがリトアニア大公国の国民たる騎士たると遍き身分の各人が [...] 書物の学問、教育、騎士の行いや己がよりよき幸福のため、また並びに己が不良なる健康状態にありては薬のために、あらゆる国と地へ、我らが仇の地モスクワ、異教徒、余を除き、我らがリトアニア大公国の諸地より出駕し出国する権利と権限とを正に持ちたるべしと [...]」(Статуть Великого князства Литовского 1566 года // *Временникъ императорскаго московскаго общества исторіи и древностей російскихъ*. Москва, 1855. Кн. 25. С. 48-49)。

⁵³ カテリナーナ・フルシェーウシカ (Катерина Грушевська, 1900-43) がこう総称したドゥーマは右。Українські народні думи: [у 2 т.] / уклад. К. Грушевська та ін. Т. 1 корпусу: *Тексти №№1-13 і вступ К. Грушевської*. Київ: Державне видавництво України, 1927. С. 88-137. また右。Колесса Ф. *Українські народні думи: [...]*. Львів: Товариство „Просвіти“, 1920. С. 66-72. フィラレート・コレーツ

の野》に行き倒れる。兄たちの偽善と利己主義が冷酷な光を放つ。^{パレード}「譚詩的悲劇性は、兄たちの思慮の絶対的分別と合理性に立脚しているが、彼らは秩序の世界ではなく、渾沌の世界を体現している。つまり、兄弟の人的連帯という、存在の意味がそれらによって失われるのである。我々は、伝統的世界受容のなかに生まれた、キリスト教文化の古典的パラダイム、すなわち^{さ迷える}放蕩息子の寓話における旅と運命の評価に関する新たな特徴を目にする。」⁵⁴ オスマン帝国の支配するアザク要塞⁵⁵からの逃走は文字通り《自由》への逃走であるが、その結末は悪を体現する兄たちを利するものであっても、善なる無力な弟には破滅を齎す。だが、この弟もまた「自由と運命」を期待して《旅》に出たのである。

無力なる善は力ある悪に敗れる。勸善懲悪や《兄弟愛》の価値観を無化する兄たちの行為を以て彼らを「渾沌」に分類するのは妥当である。だが、また別の角度から見れば、冷酷な兄たちの方が秩序を体現している。秩序とは容赦ないものである。兄弟には追手がかかっている。末弟には馬がない。騎乗の兄たちは《旅》を急ぐ。遅れを取った弟は彼らと呼ばい止めようとする。前を行くものは近代的合理主義者である。彼らは振り返りもせず自分の「自由と運命」を追求する。あらゆる《建設者》は彼らに与する。他方、末弟は何ら合理主義を示すことなく、ただ兄たちの情に訴える。彼の涙に歩みを止めれば、三兄弟は一網打尽、全滅であろう。彼は感情の人である。先を行くのが《秩序》ならば、雁行するのは下手な模倣者である。実のところ、前者が評価されるか、後者が同情されるかは物語次第であって、ただこの対立構造が共通して存在するのである。

現実の人生の《旅》の不幸が実感されるにつれ、聖書の話が近代的な形で反復される。前述のような幸福追求の《旅》観に「対立するものとして、ほぼ同時代に書かれた〔17世紀の詩〕『悲しみの不幸についての物語』を挙げることができる。これもまた^{さ迷える}放蕩息子の主題として解釈でき、世界を放浪し、遺産を浪費するが、その際、自らの分身たる運命に影の如くつきまとわれ、それはずっと彼についてまわり、最後にはすべてを失った彼を家へ戻らせる。〈弟と運命〉の主題は一定程度、今日に伝わり、古いサブテキストは忘却されたがウクライナ人に愛されている比類なき歌にも反映されている。」⁵⁶ その歌が、『嗚呼丘では……』である。そこでも先に行くのは立派な道行き、それに続くのは模倣者、滑稽で反秩序的な振る舞いをする「粗忽者」の《悪》の道行きであった。

サ (Філарет Колесса, 1871–1947) は、この歌は「〈野性の野〉」をよく表していると指摘する (Там само, с. 72)。

⁵⁴ Попович. Нарис... С. 205–206.

⁵⁵ Азақ. ドゥーマではアゾウ (Азов)、オゾウ (Озов) またはオジーウ (Озів)。現ロシア連邦、ロストフ州の市。ヴェネツィア共和国、オスマン帝国が領有。17世紀末にコザークにより陥落。

⁵⁶ Попович. Нарис... С. 206.

「サハイダーチュネイ」は女房よりも「道中に入用」のものを優先する。ここには《旅》をしたい「サハイダーチュネイ」の過剰な移動性を読み取ることができよう。入用のものが煙草と煙管であることは、帝の姫との婚儀を拒否して「蜜酒火酒」を選ぶバーイダと変わらぬ浪費と放蕩を思わせる。《コザークする》とは「境界の地の^{スボーン}遊興」⁵⁷に身を投ずることだと書いたのは近代のフルシェーウシケイイであるが、《コザークする》とは実に家業も家名も義理も責務も捨て、風任せに夢遊病の向こう側へ去ってしまう放蕩なのである。

「サハイダーチュネイ」は、同じ《放蕩息子》であっても、酔い潰れたり吊るされたりして一歩たりとも自分の足では動かないバーイダとは対照的である。両人は、《放蕩息子》の「究極^{エンテレヒー}」的の双極を成す二つの型である。片や過剰な不動性、片や過剰な移動性というはみ出しによって、両者とも有標者としての聖性を帯びる。それは非常識と悪習の標識^{しるし}であるが、共同体からはみ出したこの負の標識ゆえに彼らは《英雄》となるのである。そして、エドモン・オルティグが「神的なものはすべて人間的なものの逆である」⁵⁸ というその意味で、バーイダも「サハイダーチュネイ」も「神的なもの」に接近する。

第二の《分身》構造は、「サハイダーチュネイ」と、彼を呼び止め注意する声である。「運命の向こう見ずで勇敢な呼びかけが、この不滅の歌の最後の^{ストローフィ}連」に、つまり〈後ろの〉義弟たるザポロージャ衆がすきを窺って自分の見えざる分身に答える箇所^{箇所}に現れる。／（嗚呼、森に伏す者は答えよ、／〔…〕／いざ火を起こさん、いざ煙管を吹かさん、悲しむな！／へい、谷間を、へい——／広い〔谷間をゆく〕、悲しむな！）⁵⁹

ハタモノである「サハイダーチュネイ」が、英雄としての喝采を浴びながら最終的には脇へ退けられるべきであることは容易に推測される。彼は《旅》に出ることにより自ら共同体からフェードアウトする。そして、我々にはこの特徴は民謡の「サハイダーチュネイ」に留まらず、彼によってその「性分」が表されると安易に語られてきたコザークに何か本当に通ずるものがあるとするれば、これこそそれだと思われるのである。

コザークすること、コザーク軍の形成はウクライナ特有の現象である一方、近世ウクライナに起こった唯一の現象ではなかったことも考える必要がある。つまり、ウクライナという《ヨーロッパ - 世界》周縁の地に来ること、それ自体が《コザークする》行為と同質なのであり、ウクライナに続々現れた《理想都市》建設者も、自由村の開拓者も、荒野の修道院の隠者も、誰もが各々の精神世界の周縁に火を起こし、煙管をふかして、

⁵⁷ Грушевський. Історія України-Руси. Т. 7. С. 98.

⁵⁸ エドモン・オルティグ（宇波彰訳）『言語表現と象徴』せりか書房、1970年、312頁。

⁵⁹ Попович. Нарис... С. 206.

《コザークする》ために敢えて進み出たのである。《コザークする》とは、自らの精神世界の周縁を《旅》することにほかならなかった。それは、《旅》せぬ堅気から見れば《放蕩》である。

歌に現れて秩序を体現する「ドロシェンコ」と、秩序を転覆する「サハイダーチュネイ」とは、二つながら一つのコザーク像である。現実のコザークもこの双極のあいだを行き来した。秩序の建設と破壊、その両方に等しく向けられた渴望、この双極がウクライナ・コザークの「究極因」だったのであり、国家建設者も、逸脱的な護符呪術師もろともに、コザーク像の輪郭を決めた精神上的の《境界の地》だったのである。ウクライナ人が原型的に双極を持つことを知るために、本論はその明示的な例としてこの歌を取り上げた。

だが、民が心を寄せたのは専ら「サハイダーチュネイ」の方であった。口碑から現代文学や映像作品等に至るまで、コザークのイメージは秩序の破壊者、禁忌の侵犯者、与太者、制外者、つまりは《自由》の体現者という、「サハイダーチュネイ」の型によって表されてきた。ウクライナ人が常に《旅》し、現実の打破を目指したことは、彼らの英雄像に渾沌を結びつけた要因の一つであろう。一方、民謡の「ドロシェンコ」の表す秩序の建設者たちは歴史上果たした役割は大きかったにも拘らず、民謡の中心人物としてはあまり出番がない。この型は渾沌とは不俱戴天であり、延いては《自由》という名の渾沌の媒介者として思い描いたコザーク像に共感を寄せる人々にとっては敵となる。

だが、この民謡が学術的に大きく取り上げられたとき、学者はこのことを認めなかった。彼らは英雄ペトロー・コナシェーヴィチ＝サハイダーチュネイが「粗忽者」として描かれるのを許すことができなかった。彼であると認めると頑なに拒むか、彼が「放蕩者」として謡われることに言い訳を与えようと、彼らの思う“史実”に付会して説をなさんとした。彼らの憤慨と、「サハイダーチュネイ」の逸脱ぶりを喜ぶ民謡の担い手たちとのあいだの溝は図らずも、コザーク時代以来続いてきたエリートと庶民の対立関係を継承しているように見える。その対立は秩序の側とその管理を逃れんとする渾沌の側の対立に還元できる。まさにこの文脈で理解すべきことを、コザーク国家の統治者、イワーン・ヴィホーウシケイイ将軍（Іван Виговський, 1664 没）が自らに反旗を翻した「勝手なる者ども」について書いている。曰く、その者らは「妻も子も持たずして、家財も収穫もあらで、飲み代にせんがため他人の財を望み、博打を打ち、神と人々に卑劣なる狼藉を働きおり」⁶⁰と。この文は、モスクワ国が謀叛人らに与せぬよう牽制する意図

⁶⁰ 1657, октября 29. Письмо гетмана Ивана Выговскаго къ боярину Борису Морозову [...] // Акты, относящиеся къ исторіи Южной и Западной Россіи. Т. 4. Санктпетербургъ, 1863. С. 51.

をもって書かれたものである（モスクワ国はウクライナの政権転覆のために謀叛を支援した）、その内容は外交上の弁論術も考慮して理解すべきであるが、それでもそこには擾乱者たるコザークに向けられる社会的エリートの特徴的な視線が現れていることには違いない。

だが、秩序に異議を申し立て逸脱する渾沌は、より大きな意味での——宇宙論的な意味での——秩序を構成するためには不可欠の要素なのである。なぜなら、渾沌こそが世界の輪郭を決定する《周縁 - 境界の地》だからである。このことを物語的に二人のアンタゴニストとして表せば、こうなるはずである。「争闘神話において、主人公と敵は、それぞれ別の形で「秩序」の確立の礎となっている。[...] 秩序への脅威という考え方は秩序という考えの中に既に内在しており、罪悪の存在は体制そのものの不可欠な一部である。」⁶¹

コザークの擾乱者としての性格は、彼らが新秩序を打ち立てようとすることでむしろ一層強化される。彼らはルーシの公の秩序を打倒し、ポーランドの王権を逐い、コザークの将軍や長老衆に抗い、組織されることを嫌いながら、《自由で平等》な社会新秩序の建設を標榜した。《自由と平等》とは火と水の如き反対物であるということに気づかなかった。彼らは不一致の一致をその身で実現しようとしたが、その実、《自由と平等》のあいだに引き裂かれ、《破壊と建設》、《渾沌と秩序》の「究極因」のあいだを《出口》を求めて倦むことも知らず、闇雲に往来した。陽気と磊落を装った彼らの輝く隊列は、この土地に流れ出るはずの「乳と蜜」の水脈を探して、荒廃した枯川の窪地をさ迷い続けた。

そのような表象に、苦難のときを生きる近現代のウクライナ人は自らを仮託し、喝采を送ったのである。

⁶¹ 山口『文化と両義性』51頁。

Cossacking Ukraine

Masaki HARA

The ‘entelechies’ appear in oral literature bequeathed from generation to generation. Its exploration reveals the world in which the bearers of oral literature – narrators and audiences – live. In this article, through an analysis of the early modern Cossack song ‘Hey, on the hilltop those reapers reap’, we illustrate how Ukrainians have two antithetic ‘entelechies’.

At the beginning of the modern era, Ukrainians travelled between the centre of the dizzyingly developing ‘European’ world and its periphery, the ‘Wild Fields’ or ‘Loca deserta’. With two destinations in mind, they naturally enchanted with two poles of both ‘Order’ and ‘Chaos’ and challenged them. In general, they struggled to find a ‘way out’ of dead-end situations under the pressures of modernisation. The ‘Cossackised’ Ukrainians sought a ‘way out’ in the building of the new order and eventually established their own state.

However, the Ukrainian people sang not of the hardships of their ancestors in state-building but of their other nature – the deviations against the order. The bearers of the song, who are represented by ‘rye-reapers’ that remain in the community, sing of the Cossacks as the ‘prodigal son’ who goes on a ‘journey’, leaving the community. The Cossacks embrace the deficiency felt by people who are becoming isolated in the new order of the modern world, and this is why they can be the people’s ‘heroes’.

Keywords: Ukrainian folk songs, Cossacks, Sahaidachnyi, Doroshenko, Modern period